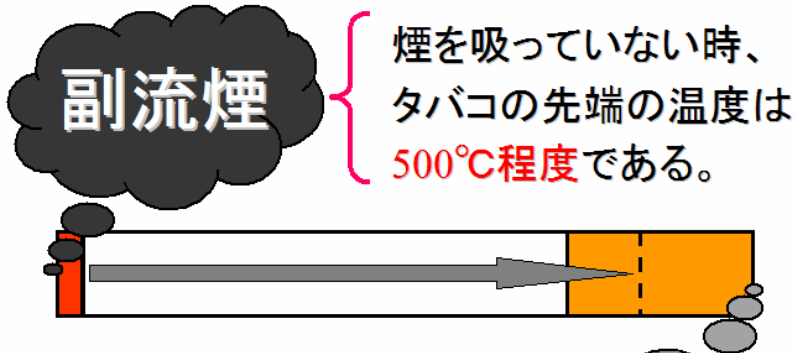


**週刊 タバコの正体**

他人のタバコの煙を吸わされる受動喫煙は予想以上に危険です。喫煙者が吸い込む主流煙に比べて火の着いた先端から出る副流煙の方がはるかに有害である事は前回紹介しましたね。では、どうして吸い込む煙より、先端のうっすら見える煙の方が有害なのでしょうか。

下図に示す通り、吸い込んでいない時のタバコの先端の温度は500℃、対して吸い込んだ時は900℃になります。つまり吸い込んだ時は高熱で発ガン物質が分解されるうえに、スポンジ状のフィルターを通過するので、さらに有害成分が除去されます。ところが、副流煙は低温でくすぶっている不完全燃焼のような煙がフィルターなしで直接漂っているので、主流煙に比べて何倍も有害なわけです。と言う訳で、喫煙者が火の着いたタバコを手を持っているだけで、あたり一面が有害物質で汚染されるのです。



煙を吸いこむ時、  
タバコの先端の温度は  
900℃にも達するため  
発癌物質も分解される

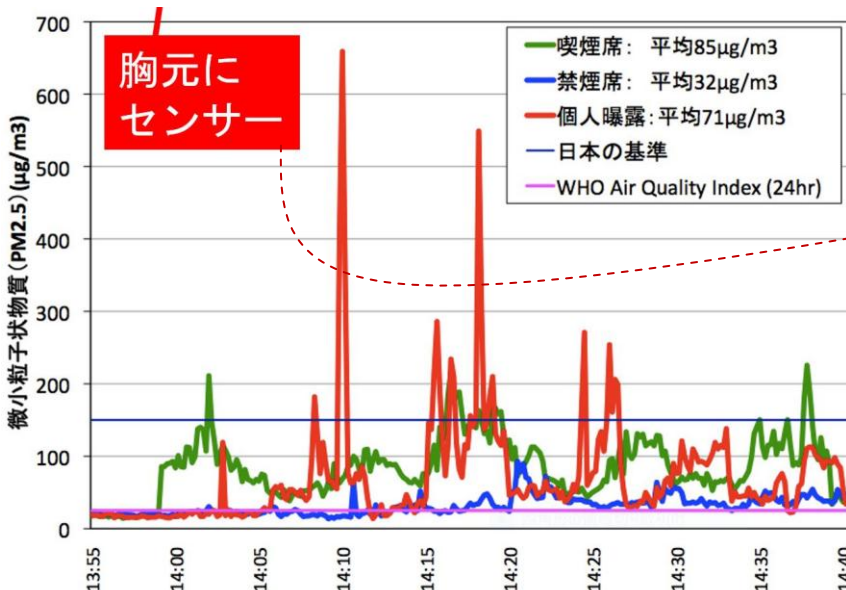


そこで、そんな副流煙の被害をもろに受ける場面が下の写真です。喫煙可能な飲食店で胸元にセンサーを付けた従業員が接客した際の微小粒子量をグラフにすると、1時間に何度も受動喫煙を受けていることがわかります。

こんな受動喫煙の被害もなくさなければいけませんよね。

産業デザイン科 奥田 恭久

(一社)日本生活習慣病予防協会 HP から



産業医科大 大和浩教授の HP から

